

宮本馨太郎は、一九三〇（昭和五）年、一九歳のときに、父・宮本勢助の民俗服飾研究の採訪調査に同行して、五月に本作品『奥利根の流れ』を撮影した。この作品は、群馬県水上地方の奥利根の流れに沿い、人びとの暮らしや、勢助の調査のようすなどを記録したものである。勢助はこの時の調査で得られた成果を『民間服飾誌 履物篇』（雄山閣、一九三三）や『山袴の話』（大日本聯合青年団編、一九三七）などにまとめている。この調査で入手した^{やまばかま}山袴（ハカマ）が、重要民俗資料「山袴コレクション一二九点」（財団法人宮本記念財団所蔵）中に二点ある¹。

特徴

勢助の民俗服飾研究の採訪調査に同行しての撮影であるため、衣服、履物、身につける道具類がおもな撮影対象となっている。その中でも中心的なのは「山袴」である。山袴とは、タツケ、モンペ、カルサン、フンゴミなど、さまざまな名称で呼ばれてきたこれら一群のハカマの総称である。山袴の形態とそれらの方言名は、勢助の主要な調査対象であった。本作品中には、山袴を着用している人びとの姿や、民家の軒先に洗濯物として干されている山袴、それらを調査する勢助の姿などが登場する。本作品中の「小日向」のシーケンスにも登場するが、勢助によれば、奥利根のこの地域では、山袴をユキバカマまたはハカマと呼び、膝から下が急に細い筒状になっている形態のもののみだとしている（『山袴の話』一五頁）。このタイプの山袴を着けた人びとの姿が、老若男女を問わず記録されている。また、本作品の後半に登場する^{よご}夜後・^{はしづめ}橋詰・^{ふじわら}藤原は、のちに藤原ダム（一九五二年着工・一九五八年竣工）によって水没した地域であり、水没前の人びとの暮らしが記録されているという点で貴重である。さらに、この映画の撮影の翌年である一九三一（昭和六）年九月一日に全線開通する上越線の工事が進むようすなども記録されている。

構成

馨太郎自身によるタイトル・字幕・地図の画面と、現地で撮影された映像が組み合わされて編集された作品である。

冒頭は、「美やもとグラフ」というロゴ画面ではじまり、「地理風俗資料」というタイトルに続いて、メインタイトルと撮影年月日が示される（①）。

次に、本作品の撮影地「群馬県・利根郡・水上村」が示され、地図とともに「湯ノ原→小日向→鹿野沢→大穴→幸知→綱子→栗沢→夜後→橋詰→藤原→宝川」という行程が示される。

続いて、湯ノ原を起点とし、終着点の宝川まで、奥利根沿いに集落を訪ねて川上へ上っていく映像が始まる。それぞれの集落の名称は、漢字と読み仮名の併記で示される²。最後の「終り」というロゴは、『うちはこの出来るまで』に使用されているものと同じである。

内容

〈湯ノ原（湯原）〉 字幕「水上駅の南一キロ半、温泉は、弱塩類泉に属している」のあと、小日向方面から利根川を挟んで撮影された映像が続く。温泉旅館、利根川にかかる水上橋、上越線天神山トンネルなどが見える。

〈小日向〉 「湯原の対岸にある、湯の町である」と字幕があり、石をのせた板や樹皮製の屋根の民家が見える。「此の地方では、山袴の事を、ユキバカマ或ひは、ハカマと呼んで居る」という字幕ののち、洗濯する女性（②）、「ショイコ」や「セナカアテ」を着けているようす、春の山菜ノビルの処理をしている女性の姿、この女性を勢助と見られる人物が写真で撮影しているようす（③）が続く。商店には養蚕で消毒薬として使用する「フォルマリン」の広告が貼られ、店の前では、緋の着物にハカマ、草履姿の少女や、学生帽に靴を履いた少年などの姿も記録されている（④）。仕事着の大人たちの姿も見える。トタン屋根の家、自転車に乗っている人、上越線天神山トンネルと線路、旅館（水上館）、炭焼きの煙などに続き、「新聞配達の姿」という字幕とともに、笠をつけた新聞配達の男性が記録されている。

〈鹿野沢〉 水上駅前の雑貨店、客待ちの馬車、たきぎ用の枯れ木を運ぶ少女（⑤）など。「井戸の神さま」という字幕のあと、それを調査する勢助のようすが見える。奥利根では、沢から水を引き込み、堰^{せき}をつくって「井戸」として利用することが一般的だったようである。子どもたちがフキを採っているようす、この季節に始まる畑仕事のようす、工事が進む上越線の線路の橋台や鉄橋の姿が続く。

〈大穴〉 川にかかる鉄橋、自転車を押して歩く人、その人に話しかける勢助の姿が見える。道には上越線の敷設工事のために敷かれた軽便線のものと見られる線路もある。道標「右 清水越へ 藤原方面ニ至ル／左 坪野ニ至ル」に続き、赤ん坊を背負って歩く女性達、道標近くでメモをとる勢助、水や湯を引き込むために使用されていた「木管」を横

に立っている男性、畑仕事をする男性、子どもたちのようす（⑥）、地域の人に話を聞く勢助のようすなどが続く。「丁度、五月のお節句なので街には、幟が立つて居る」という字幕ののち、幟旗がはためく通りのようすが写し出される（⑦）。字幕に「此の地方の炭の集散地…」とあるように、大穴は当時、薪炭の集荷場として賑わっていた。馬に炭を積むようす、桜井商店という豆腐屋の袴纏ほんてんを着た男性、板を背負って運ぶ女性、馬で炭を運ぶようす、道路の両側に並ぶ雑貨屋や豆腐屋、腰に鉋なたをつけ、袋状の入れ物を背負った男性の姿などが記録されている。字幕「此處から路は、二つに分かれる。右は、藤原へ。利根川に沿ふて。左は、清水峠へ。上越線に沿ふて」に続き、水を汲む女性、干された仕事着、木製の幸知橋を渡る勢助の姿が見える。

〈幸知〉 河原で洗濯をする人、干された山袴を調査する勢助の姿がある。「豆腐屋さんの姿」と字幕があり、大穴の豆腐屋・桜井商店の男性が豆腐を運ぶ箱を背負って歩いているようすが映る。農作業中の女性の姿もある。

〈綱子〉 遊んでいる子どもたちの姿、字幕「清水越のループ状トンネルの一部」に続き、上越線の清水峠のループトンネルの一部が外に現れる部分の橋脚の工事現場と見られる映像が登場する。また、材木や炭などを山から運ぶソリが軒下に立てかけられているようす、軒下にかけてられたワラ靴、仕事着姿の女性が記録されている。「雪ぐつ」と字幕が入り、地面に置かれたワラ靴を撮影している³。字幕「桑の木のエ」に続いて、降雪の多い地域に特有の背の高いクワのエが映る。

〈粟沢〉 深い溪谷となり、道も急な坂道となる。馬に乗って帰る女性の姿が見える。

〈夜後〉 急流となった利根川のようす、名所の立岩たていわの姿、字幕「炭をつんで、大穴まで行つた、帰り馬に乗る…」に続いて、馬に乗せてもらった勢助が夜後橋を渡って行く姿が見える。

〈橋詰〉 道はさらに険しくなる。子供達のすがた、利根川に注ぐ夜後沢の流れなどが見える。急な坂道を登ると、平らな集落に出る。

〈藤原⁴〉 字幕「安倍貞任の後胤が潜住して作つた村だと云う、伝説のある部落…」に続いて、農家のすがた（⑧）、米や稗ひえなどの穀物を搗くバツタリと呼ばれる水車の姿が見える。雪解けで水量が増した沢、温泉旅館が客へのサービスとして置いたとみられる杖に続き、「炭置場」と字幕があり、近くの山で焼いた炭を出荷するために集める場所を記録している。「利根川と宝川の合流点—此處から私達は宝川に沿うて上る」という字幕のあと、奥利根橋を渡る勢助、支流の宝川が続く。

〈宝川〉 字幕に「宝川まで 小日向より一六キロ。宝川の流りに沿うた、一番奥の部落」「部落と云つても、此處には、人家は、唯一軒しか無い」とあるように、当時宝川には、地域の農業従事者の湯治場として利用されていた温泉が一軒あるだけだった。「是が温泉の風呂です。塩類泉です」と字幕にいう宝川温泉は、河原の小さな露天風呂と、河原に突き出した客室の下に内風呂があった。上越線の開通とともに世に知られ、しだいに立派な温泉旅館になった。

最後は「帰途につく」と字幕があり、宝川にかかる温泉の吊り橋を渡る勢助と、旅館の番頭らしき男性が送っていく姿で終わる。

[謝辞] 本解説執筆にあたり、林好一氏（みなかみ町文化財調査委員）から多くのご教示を賜りました。心から御礼申し上げます。

写真キャプション

- ①メインタイトル画面。「5. 5. 5」は撮影年月日で、昭和五年五月五日。
- ②洗濯のため水を桶に入れる女性。山袴は、膝から下が急に細くなり、膝以下が筒状になっている形式のもの。
- ③三脚を立て、女性の写真を撮影しているように見える。撮影している男性が勢助であるかは不明。
- ④画面右端に、蚕室等の消毒に用いられる「フォルマリン」の広告が見える。緋の着物の少女、学生帽の少年も山袴を着けている。
- ⑤たきぎとして使う枯れ木「ボヤ」を背負う山袴姿の少女。
- ⑥赤ん坊を背負う子供たち。手前に移っている少年も山袴を着けている。勢助の足元の線路は、上越線敷設工事のための資材・人材を輸送する軽便線のものと思われる。
- ⑦通りには、山袴姿の女性たちが見える。
- ⑧採光や換気のため、屋根の妻側を切り落とした民家。二階部分を蚕室とするために工夫された屋根型。

1 ハカマ（木綿・紺無地、群馬県利根郡水上村藤原宝川、昭和五年五月五日採集）、ハカマ（木綿・紺、群馬県利根郡水上村栗沢、昭和五年五月五日採集）の計二点（(財)宮本馨太

郎記念財団編『(財)宮本馨太郎記念財団収蔵民俗資料及び下町の民俗調査報告書』一九八一、一五頁)。

2 映画中に示される地名の読み仮名のうち、以下のものは、地域の人びとの発音と異なっているという。「湯ノ原：ユノハラ」は「ゆばら」、「小日向：コビナタ」は「おびなた」、「鹿野沢：カノザワ」は「かのさわ」と、それぞれ発音されている。

3 勢助によれば、綱後ではこの履物を「クツ」と呼び、老神では「ユキグツ」と呼んでいるという(『民間服飾誌 履物篇』一三二頁)。

4 藤原は、橋詰、打上、見沢、天王平、横山と連なる集落から成る。